

二月のテーマ 決断

決断のとき

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二一～一九九九）のこゝとばを掲載します。



え・小島サエキチ

ど

うしたらよいか。右に行こうか、左に進もうか。それとも後にしりぞくべきなのか。ハムレットではなくても、迷うことがいくらでもある。迷いのない生活、悩みのない人生というものは、まずあるまい。

ここにそうした解決への基準というか、判断のよりどころになるものが根本的、基礎的な問題として存在することを、強く思うのである。迷いや苦しみ、悩みに対する心のきめかたの根拠になるものことである。

まことに平凡な言い方だが、それは、結局「人のため、世の中に役立つため」ということだ。そのようなことなら、前から知っているなどと、簡単に軽視してしまつてはあぶない。実際に迷いだし、悩みだすと、人のことよりも、やはり自分のためということが正面に出てくるのではなからうか。

人から金を貸してくれと頼まれたとする。貸してやりたくはないけれども、貸してやらねば義理がわるいといったケースで迷う。

この場合さっきの基準をもって。貸すことがその人のためになるか、ならないか。貸すことによつて、かえつてその金をムダにしたり、身をもちくずしたりするようなことが明らかであるならば、結局その人のためにはならない。そうした場合には、たとえ義理がたたなくても、きっぱりとその人のために断るのがよい。面目にこだわらず、自分にこもつて妥協していると、かえつて後で自他共に苦しむようになる。

どうするのが隣人のためか、知人のためか、わかりにくいこともあるであろう。そうしたときにはあらためて信頼すべき人に尋ねるのがよい。自分のしようとしていることがいったい人のために、世のために役立つようなことであるかどうか、そこを見つめてゆくと、き解決する糸口が開けてくる。

*

いつも自分のみをおし立てる人は、きらわれる。自分のためを思うならば、他の人のためを思うべきである。お客のためによい製品

をつくるとき自分もそれでもうけさせてもらえるのである。

世のために役立つような仕事をした人が、世の中から尊敬されたり、たいせつにされたりするのである。たとえ一時の紆余曲折はあつても、ながい目でみると必ずそうなっている。

あたりまえといえば、これほどあたりまえのことはない。しかし、このあたりまえのことが、うっかりすると、そう思えなくなり、エゴが先に出てしまい、そのために迷い、苦しむような場合が多いのではなからうか。

いずれにせよ、より多くの人々のために何とかしたいと目標をしっかりと立て、そこをよりどころとして、多くの意見も聞き、気づいたことを行ないつつ努力していると、少数者にも多数者にも喜んでもらえるような手段がやがて見つかるものである。

一家の愛和も社会の繁栄もこの方向で築いてゆきたい。現代はあまりにエゴが多すぎる。

〔月刊『新世』一九七三年六月号より〕